

Genius English Course I・II Revised

言語の姿を忠実にとらえた教科書

言語学者
町田 健



◆全体的な印象

英語の教科書は、当然のことだが英語の文章を用いて、文法や語彙を学習させることを目的として作られている。また、私が高校生の頃は、発音や聞き取りは、ほとんどか全く重視されていなかったが、近年の英語教育では必須の学習項目として位置づけられているため、この側面についての配慮もしなければならない。

Genius English Course I・II Revised（以下 *Genius I・II*）は、この観点からすると、高度に目的を達成している教科書だと言える。たとえば文法・語彙の側面から見ると、各章で解説される文法項目を反映する英文の箇所には、その旨が記されていて、学習者と教師双方にとって便利な配慮である。

英語の教科書に載せる文章は、できるだけ英語が使用される場面の全体的な姿を反映した方がいい。したがって、文学や思想だけでなく、人間が構成する社会の多様な状況を主題とするものであることが望ましい。その点 *Genius I・II* は、民族や言語の多様性、社会問題、生活の実体験、冒険とミステリーなど、実に様々な主題についての文章を提供してくれている。主題が多様であれば、語彙もそれに応じて多様になるのは当然だから、この点でも、教科書としての目標を正しく実現していると言えよう。

外国語を適切に理解し運用する能力を身につけるためには、伝統的には文法の理解が重要だとされてきた。確かに文法に従わなければ、理解可能

な文を作ることはできない。言語研究者たちの最も重要な関心事も、文法に関わる問題の解明だった。私も文法のことをあれこれ考えるのが好きなのだが、英語を実際に話したり読んだりするときに一番重要なのは、結局のところ語彙力だと、最近では思うようになった。

英語の本を読んでいる、知らない単語に出くわすのは普通のことだが、この単語の意味を前後の文脈から正しく推測できることはあまりない。だから、文章を理解するためには、結局のところできるだけたくさんの単語を覚えておく以外の方法はない。英語を話す場合であれば、自分が伝達したい事柄を表現するために使う適切な単語を、即座に思い浮かなければ、会話など全くもってできるはずもない。だから、文法はもちろん大切だが、語彙力を身につけておくことが、文法の知識を活用して英語を運用するための、まず第一の前提だと思う。

Genius I・II で学習する語彙は、高校生向けだからそれなりに数が限定されるのは当然として、十分に多様な側面で用いられるものであり、語彙を豊富にするための、効果的な基礎を提供しているものと考えられるだろう。

◆文章の主題

Genius I・II に掲載されている多様な主題に関する文章群には、全体を通して読んでみると、一定の傾向がある。それは「弱者と自然に対する配慮」である。貧困や戦乱に苦しむ人々、障害をもつ人々、満足に教育を受けられない子どもた



ち、環境保護運動に取り組む人々などを対象とする文章が、この教科書の大きな部分を占めている。現代社会が直面する問題を取り上げる姿勢には、この教科書の人間と環境に対する真摯な考え方を捉えることができる。それは確かに、地球に生きる人間としてあるべき姿の1つだろう。

こういった真面目な問題を、英語で考える機会をもつことが大切なのは言うまでもない。学校で使われるからには、こういう真面目な話題も大切だろう。ただ、人間がいつも社会の重要な問題のことばかり考えて生きているわけではないことも、同様に確かだ。私のようなお気楽人間にとっては、映画やスポーツ、お笑いなどの娯楽、名所を巡る旅行（鉄道旅行ならなおよい）や海山での遊びなど、気楽に明るくなれるような話題もほしいところだ。*Genius I* に実際に取り上げられている Lesson 2 の料理の話題や、*Genius II* の Lesson 8、南極探検を主題とする文章などであれば、やはり読んでいて楽しめるし、学習者の意欲も高めることができるのではないと思う。

◆言語の問題

もちろん、文学や思想という、伝統的に「現代国語」で取り上げる対象だった主題の文章も、何と言っても、言葉でなければ実行できない人間の精神的活動なのだから、1つや2つはあっていいかもしれない。その点では、「言語」を主題とする文章が掲載されていることは、言語学を研究している私にとっては嬉しいことだった。

Genius I にある Easy Japanese（やさしい日本語）の話は、語彙の範囲を限定し、構文もできるだけ単純にする方法で、日本語を母語としない人々にも分かりやすい日本語表現を作るというものだ。この方法であれば、日本語を変質させることなく、容易な理解を実現させることが可能になる。あまり考えたことがなかった話題だったので、興味深く読んだ。このやさしい日本語を、災害時などに実際にうまく使いこなすためには、母

語話者であっても、相当に高度な日本語力を必要とするかもしれない。

Genius II には、意味の伝達以外に言語が持っている様々な機能について解説する課がある (Lesson 2: The Functions of Language)。ヤコブソンという多方面にわたって重要な業績を残した言語学者が提示した機能であり、言語学者にはよく知られている。言語の最も重要な機能が意味（事柄）の伝達であることは言うまでもないし、高校生も言語とは意味を伝達する道具だと言語の基本的定義については、すでに知っていることだろう。しかし、「こんにちは」のような挨拶のための表現が、事柄の伝達ではなく、自分が相手に対して関心を持っていることを表す「交感的機能」を持っていることなどは、やはりこのような文章を読むことで気づかされるものである。その意味で、この課は、どの言語にも共通だが、意外に意識しない側面を言語が持っていることを教えてくれる興味深い内容である。

Genius I・II が取り上げている文法項目は、基本的に重要な項目はすべて学習できるようになっている。“There being no bus stop”のような、現代の英文ではまず使われることのない独立分詞構文を取り上げているのは、大学入試を意識していることかもしれない。また、伝統的に「付帯状況」という正体の分かりにくい用語で呼ばれてきた、新たな事柄を付け足す働きをする分詞構文については、指導資料を参考にきちんと指導してほしいと思う。

もう1つ、命令や提案などを表す動詞や名詞に支配される that 節中に現れる動詞の原形は、この教科書では should の省略だと解説している。確かに、仮定法は過去と過去完了だけにしておいた方が簡単で理解しやすい。その上に仮定法現在までも加えるのは、学習者の負担を増やすだけだ。多分この理由で仮定法現在は教えないのだろう。教育的方策として理解できる。

（まちだ けん・名古屋大学教授）